

ことし成人になられた1,836名(花矢地を含む)の方々をお祝いする成人式は、1月15日市民体育館で盛大に行なわれました。

ことしの成人式は、いつもとは趣向を変え、式典のあと「日本S・Tジョンソン商会社長、石田茂夫氏の講演「大人の世界」を聞いていただきました

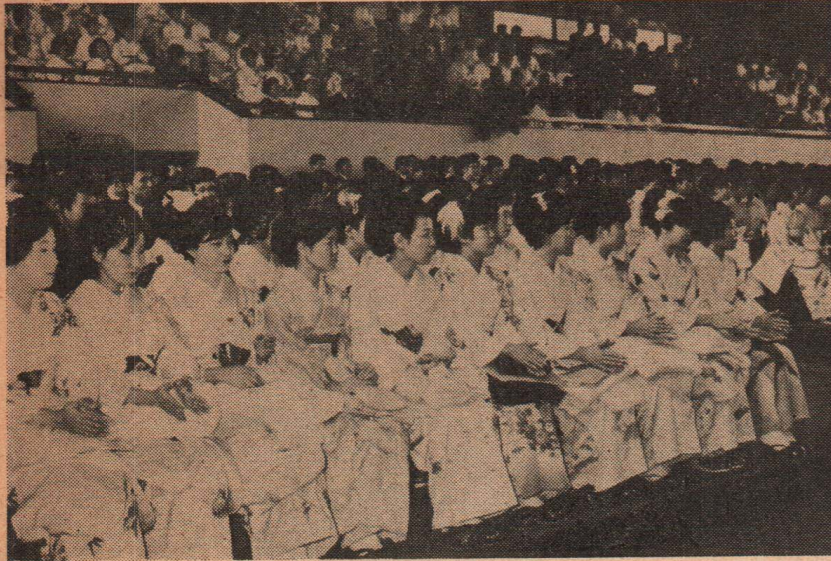
また、成人者への贈り物は、大人の仲間入りにふさわしい「社会人手帳」をお贈りし、法律や社会的なエチケットを勉強していただくことになりました

た。

なお市の教育委員会が、今年成人を迎えた方々から募集した「成人となって」の感想文は、40名ほどの応募がありました。

教育委員会で慎重に審査した結果、市内舟場の田中良男君の作品が、最優秀作品に選ばれましたので、その感想文をご紹介します。

(写真) ふりそで姿がめだった今年の成人式



〈成人式〉

一、八三六名が

大人の

仲間いり

(入選者)

- 最優秀作品 田中良男(舟場)
- 優秀作品 沢田時子(豊町)
- 〃 佐藤優子(常盤木町)
- 優良作品 阿部陽子(幸町)
- 〃 高橋圭子(寺町)
- 〃 竹内千和子(十二所)
- 佳作 丸岡信雄(立花)
- 〃 川越孝敏(幸町)
- 〃 越前谷洋平(獅子ガ森)

成人、「人と成る」

私たちは生まれてこの方20年、それぞれ皆「人」としての道歩んできた。いまさら「人」として認められ生きていくものではない。このままで生きてきた長い時間を決してむだには過ごさなかったはずである。私たちは今ここに成人として社会に、さらに、はばたこうとしているのである。

では「人と成る」とはどういうことを意味するだろうか。単に飲食喫煙等の法的に定められたものだけではないと思う。いままでにない人間としての自覚、人格、個性を表出するための一枚の薄いようで、がんじょうな壁を通り過ぎることなのである。長い人生からしてみれば、何万分、いや何10万分の一部にしか値いしないこの一時期が私たちにとっては大変たいせつなのである。

また、私たちは「成人」という、うわべだけのレッテルをはられて生きていくべきでない。商品と違って、血の通う思考力のある人間なのである。

むしろ、現時点において、いままでの生き方をかえりみ、反省して社会人として生きる心がまえを再認識し、社会という、ときにはやさしい、また、ときにはきびしい、このいろいろな社会の矛盾をばく然とした世を、脳裏にきざみこみ生きていかなければ、なら

ないと思う。

よく「成人になったんだから——」「大人になったんだから——」とマスコミはさわぐ、しかし、私たちはそれに甘えて自己をみつめることを忘れてはならないと思う。むしろ、さわがれることによって自分の一挙一動を責任をもって行なわなければならない。あ

成人としての自覚



市内舟場 田中良男

る人はマス・コミを批判し、ある人は社会を批判するだろう。むしろ、私は批判することをすすめたい。批判することとは、とりもなおさず自分の進もうとしている自分に適合した生き方を探究し、知っているからで、また新たな生き方を発見する糸口を与えてくれるかもしれない。

「社会とは何か」、私は一人と人との

ぶつかりあう場—と思う。それも表面にはでない。精神的な戦いの場なのである。人間は誰れでも社会に認められ高い地位をきざぎ、名誉をうけ、少しでも豊かな生活をしたという気持を多かれ少なかれ持って、深く根ざしていると思う。これは誰れにでも共通した欲望である。

しかし、これらの欲望は社会が与えてくれるもので、こちらからそういうものに余り執着すべきではない。自分としては、自分の理想や信念に従って、立派な社会的意義のある仕事をしていくことが、人間としての最大の義務であり、また、人間としての真の喜びであると思う。さらに自己を大いにのばし、きたえあげ、社会的活動を行なって現代の社会が私たちによせている期待にそい、社会全体の利益と、その進歩発展のため役立っていかなければならないと思う。

ようするに、私たちは多かれ少なかれ自然と人生の本質について考え、国家と社会のあり方について論じ、つねに勇気と向上心を失なうことなく、人間は何をすべきかということを探究していかなければならないのである。

つまり、自分の個性を尊重し、その個性にそくし、個性をのばしていくことが真の成人としての自覚ではないだろうか。